

寺田縄日枝神社 神輿（２） 譲り受・明王太郎景元の改造 （２０２１．５）

前号では、地元の太鼓連（現・山王会）の方々により、自ら力を合わせ、手造りで日枝神社神輿を完成させた経緯を紹介いたしました。

手造りの背景は、これまで担がれてきた神輿は、長い年月を経て損傷が目立ち、渡御の時事故があっては危険であること。新しい神輿を購入するには多大な費用を要すること。併せて、太鼓連の方々の神輿を担ぎたいという思いの結実が神輿を手作りすることに集約されています。

寺田縄日枝神社の神輿について、『日枝神社には、一木造りの太藪手（ふとわらびて）をつけた、特徴ある形をした神輿がある。』（手中 正「神輿と明王太郎」東京美術）

寺田縄の神輿は、一本の木で作られた、大きな太い藪手（*）が付けられ、他の神輿には見られない特徴があると述べられています。

* 藪手：早藪のように先端が渦状に巻いている形で、神輿の屋根の軒先につけられている

これまで担がれてきた神輿（古神輿）は、日枝神社の神輿として歴然としていましたが、寺田縄の神輿となるには歴史的背景がありました。

（１） 伊勢原の三ノ宮に位置する、「比々多神社」から譲り受けた神輿

比々多神社の神輿を寺田縄村が譲り受けました。比々多神社の神輿を新調するのにあわせ、譲り受けました。当時、山王社（現・日枝神社）は隣接する東善寺が別当職を勤めていました。加えて、「東善寺は比々多神社、伊勢原大神宮の別当を兼務」していたといわれています。この縁であったのでしょうか、比々多神社の神輿を譲り受けることができました。

平塚市文化財調査報告書には、『この神輿は、以前から寺田縄村の神輿として、村民に担がれてきたのではなく、慶応二年（１８６６）に伊勢原三之宮比々多神社の古神輿を譲り受け、明王太郎景元によって大改修されたものである。』

譲渡は、１８６６（慶応２）年のことです。

■ さんのみや比々多神社神輿の寺田縄村への譲渡

伊勢原三ノ宮の村民によって長い間使い込まれた神輿は、飾り金物を全部取り外し、白木の状態で寺田縄村に譲渡されました。

その時交わされた書状（「比々多神社冠大神御輿控」）には、次のように記されています。

慶応二年寅七月七日

一 金拾両也 古神輿、ただし、金物相除き申し候。

右は古神輿木地代金に御座候。同国寺田縄村鎮守山王宮若者世話人罷り出で候。外に又赤飯代金二歩ならびに酒二歩分、これは直にて持参。明王太郎仲立ちを仕り古御神輿請け取り、相渡し申し候。御役人中方村中お見送りなられ候。

明王太郎、伊勢原村山田伊兵衛殿宅まで相送り申し候。

寺田縄村の山王宮若者世話人が代金の拾両と他に直接、赤飯代二歩、酒二歩分をもち、飾り金具を取り外した白木の神輿を譲り受けました。仲立ちは宮大工であり神輿を造る最高の技術をもった、明王太郎景元（*）が担いました。

* 明王太郎景元： 宮大工の技術はとりわけ秀逸し、大山寺本堂（大山）、前鳥神社拝殿（平塚）、健速神社拝殿（秦野）など多くの寺社を手掛けています。明治十五年、皇居造営の時、皇居宮殿の設計図面の作成に加わりました。

神輿の造営にもその手腕を発揮し、平塚、伊勢原、秦野・茅ヶ崎、大和など各地にわたる神輿十棟を完成させています。

明王太郎の神輿造りの秘術について『神奈川県の中部に三之宮比々多神社がある。この神社の神輿は、あばれ神輿として知られ、祭りのとき地面に横倒しに落とされる。江戸時代から明王太郎によって造られてきた神輿である。一般の大工が作ったのであれば、落とした時に仕口（*）が外れ、壊れてしまうであろう。明王太郎の仕口は、秘伝の技術が受け継がれているのであろうか、強固であり、落としてもびくともしない。それ程しっかりした木工技術を持っていた。』（手中 正「神輿と明王太郎」東京美術）

* 仕口（しぐち）： 建築で木材を組み合わせるときの組手<木口・継手>

引用が長くなりましたが、堅牢で頑丈な神輿の構造は、明王太郎の秘伝ともいわれる高度な技術をもってのことでした。日枝神社の神輿もこの伝統技術を受け継いだ神輿です。

（２） 明王太郎景元による大改造

明王太郎景元の仲立ちをもって譲り受けた白木の比々多神社神輿は、飾り金具を取り付け、神輿本来の形にするために、1866（慶応2）年7月28日、寺田縄村と明王太郎景元との間で神輿の大改修の契約が結ばれ、新たな神輿に生まれ変わることになり

ました。

下記が、明王太郎景元との間に結ばれた請負の証文です



「請負申す神輿注文の事」が書き出しです。

内容は、改修金は七十六両一分であること。『請負人は「請負の諸方手落ちなどこれ無きよう、念入り出来差出し仕るべく候」と述べたうえで、万一仕様巨細長（こさいちょう）と相違の所があれば、指図どおりにきつと直します。』と結んでいます。明王太郎は『手付金三十両を受取り、神輿の大改修に取り掛かった』（手中 正「神輿と明王太郎」東京美術） この証文は、山王社（今の日枝神社）の別当寺である寺田縄村の山王山東善寺と神輿世話人宛に出されました。

江戸時代の末年、寺田縄村の村民は、比々多神社神輿の購入代金と、当代随一の高名な宮大工の明王太郎景元の手による神輿大改修の経費を合わせ、金八十六両一分その他諸経費を含めると、神輿を新たにするために（以前の神輿の資料はありませんが・・・）相当な高額の出費を重ねました。

八十六両一分を今の価格に換算することは、国会図書館や日本銀行の貨幣博物館の資料によると「当時と現代は社会状況が全く異なり、大変難しく不可能」と、厳密な比較はできないとされています。

手中 正さんからの書状によると、当時「新しい神輿を購入するに等しい額だった」とのことです。

米作中心の寺田縄村が、多額な現金で神輿を手に入れるためには、全村挙げての大事業だったに違いありません。神輿にかかる氏子達の気概を知ることができます。

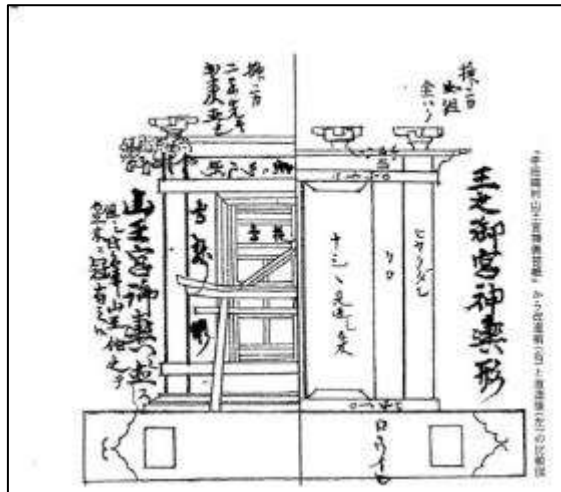
(3) 比々多神社神輿からの主な改造点

手中 正「神輿と明王太郎」東京美術発行の書物から改造の様子を見てみます。
明王太郎が書き記した「寺田縄村山王宮神輿控帳」には、神輿の仕様が図入りで詳細に記されています。

図の右側が、改造前の比々多神社神輿の部分図で、左側が改造後の寺田縄日枝神社神輿の図面です。

図には、山王鳥居(*)が、はっきり記され、改造される扉も描かれています。また、柱の上部を飾る頭貫木鼻(かしらぬききばな)(*)の彫り物は、明王太郎の特徴である獅子頭のデザインが描かれています。

* 山王鳥居：鳥居の笠木の上に両手を合わせた合掌形の冠が付き、神仏の融合した形を表わすとされています。神輿に山王鳥居が付いているのは、全国的にも珍しい形式です。



* 頭貫木鼻：神輿を支える四本の柱の上部に彫り物の飾りをつけることが多くみられます。

主な改造点とその部分を、ゴシック体で記します。

- 1、箱台輪 手入れこれなく候
- 1、鳥居 四か所、但し新造出来申し候。山王宮鳥居笠木中に造るもの成り
- 1、幣軸 四か所、但しこれまで三之宮御輿にこれ無く、この度新造出来、戸脇に上下雲龍八枚彫り入れ申し候
- 1、須弥台輪 四隅共、但しこれまで三之宮ござ無く、この度新造出来申し候
- 1、下長押 同断、但しこの口は破じ候に付き新造
- 1、桷組 十二備、但しこれまで三之御宮にては出組と申し候仕法造り方にござ候所、この度二手先桷組に直す
- 1、露盤 仕直し、但し先造三之御宮にては、箱仕立て出来にござ候。然る所台輪付き柱立新造出来
- 1、唐戸 八枚、但し三之御宮神輿は正面古和戸造り、入口一カ所。然るにこの度四面唐戸に成り、表裏とも開きに相成り候。左右は開き申さず候。棹は上下とも七本に出来申し候

(手中 正 神輿と明王太郎 東京美術)

比々多神社神輿には無かった部分を新たに取り付けたり、改造したりした点を読み取

ることができます。

以上のように三之宮比々多神社の白木の神輿は、寺田縄村に引き渡される前、明王太郎景元によって、多くの点で大改修と呼ばれる改修・改造が行われました。しかし、神輿の本質は、三之宮比々多神社の神輿の特徴を継承しています。

第一は、真柱のない構造があげられます。一般に神輿の屋根は、内陣の中心に通っている真柱で支えられています。しかし、三之宮の神輿は真柱が無く、屋根を四隅の柱で支え、内陣の中心軸の位置に丈夫な麻縄を張って屋根と箱台輪の間をしっかりと引き付け、両者が離れないように結び付けてあります。これによって、屋根はしっかりと胴に付いて離れない構造になっています。祭礼の時「あばれ神輿」は、田畑に投げたり、川に投げ入れたりとその暴れぶりは尋常ではありませんでした。譲り受けた寺田縄の神輿にも真柱がありません。

第二は、屋根の隅木の蕨手（わらびて）には、倒しても壊れないような頑丈な太い材木が使用されています。寺田縄神輿は、隅木の太い蕨手の渦に補強がなされ、破損しにくい配慮がされています。

第三は、全国的にも珍しい「山王鳥居」が設けられています。

